

唐代伝奇「陸顛伝」に関する一考察(中)

増 子 和 男

前 言

前稿に引き続き、唐代伝奇「陸顛伝」に見える用語の幾つかを検討し、それらを通じて、本作品がいかなる性質を持つものであるかを考えることとしたい。

科挙に落第し、太学に学んでいた主人公・陸顛は、突如訪れた胡人によって腹中の奇虫「消麴虫」を高額な値で購われる。

胡人より得た報酬で悠々自適の生活を送る陸顛のもとに、ある日、胡人が再び訪れ、海中へ行ってみないかと誘う。誘いに乗った彼は、胡人とともに海辺まで出かける。海辺に着くと胡人は消麴虫を取り出すと油膏の入った鼎に入れて火にかけ、海中の使者を呼び出すが、持ってきた宝を不服として追い返すこと三度にして、「至宝」を手に入れる。

至宝を得た胡人は、これを呑むと、自分について海中に入るよう陸顛を促す。彼は胡人の佩帯に掴まって海中に入るが、海水は豁然として開き、鱗介の族は辟易して彼らを避ける。竜宮や蛟室に行った彼らは、おびただしい宝を得て、地上へと戻る。

唐代伝奇「陸顛伝」に関する一考察(中)

その宝の一部を分け前として得た陸顛はそれを南越で売り払った後、閩越の間で一生活を過ごした。

本稿で取り上げるのは、作品の後半部分に登場する「海」と、「蛟室」と言う二つの用語である。

一 「海」(南海)

周知のように、我々四方を海に囲まれている日本人とは異なり、多くの中国の人々にとって、海は必ずしも身近な存在ではなかった。それは、歴代の政治・文化の中心地とあまりに隔絶した所にあるがために、異域と意識されてきた。

○海とは、天池(天の池)なり。以て百川を納るるもの也(後漢・

許慎「説文解字」)

○海とは、晦(くらしい意)なり。穢濁を承くるを主る。その色黒くして、晦きなり(後漢・劉熙「釈名」)「积水」)

多くの川が注ぎ込み、あらゆる汚濁をいれる広くて暗いところ。さらに、『楚辞』や『山海経』に示された、怪物や不思議な生き物たち―大蟹、牛のような姿で一本足という變、人の顔と手足を持ち魚身という鮫魚等々―の住む、ある種不気味な場所―この辺りが、彼らの海に対する標準的イメージであったと言えよう。

こうした海に対するイメージは、唐人においても基本的には変わることにはなかつたようである。試みに、『全唐詩』から幾つかの用例を徴すると、海は次のように歌われる。

○魑魅天辺国

魑魅 天辺の国

窮愁海上城

窮愁 海上の城（宋之問「藤州を発す」巻

五三）

○海氣湿蟄薰腥臊

海氣湿蟄（じめじめする意）薰 腥臊（生臭い意）たり（韓愈「八月十五夜、張功曹に贈る」巻三三八）

○浮天滄海遠

天に浮かんで滄海遠く（錢起「僧の日本に帰るを送る」巻三三七）

○海天愁思正茫茫 海天愁思 まさに茫茫たり（柳宗元「柳州の城楼に登りて、漳、汀、封、連四州の刺史に寄す」巻三五二）

潮風が生臭いと言ひ、海は遙か遠いと言ひ、そこは魚竜の住処と言ひ（韓愈「八月十五夜」）、海は必ずしも彼らにとってプラスのイメージにはとらえられてはいない。

そうした遠く、暗く、不気味な海を描く一方で、唐人たちは次のような世界をも同時に歌う。

○靈童出海見

靈童 海より出て見れ

神女向台回

神女 台に向かひて回る（李嶠「雨」巻五

九）

○碧海三山波浪深

碧海 三山（東海にあると伝えられる三山）

波浪深し（駱賓王「女道士 王靈妃の道士李榮に贈るに代りて」巻七七）

○忽聞海上有仙山

忽ち聞く 海上に仙山有り

山在虚無縹渺間

山は虚無縹渺の間に在りと（白居易「長恨歌」巻四三五）

○滄海月明珠有淚

滄海 月明らかに 珠涙有り

藍田日暖玉生煙

藍田 日暖かにして 玉煙を生ず（李商隱

「錦瑟」巻五三九）

海は、彼らの日常と隔絶した異域であるだけに、不気味さと同時に、神仙、神女の住処、美しい真珠のとれる場所として、ある種の

ロマンチズムを感じさせるところでもあった。

* *

「陸贄伝」に言う海が、具体的にどの辺りを念頭においているかは、作品中登場する言葉―胡人の本拠地である南越（広東・広西地方）、その周辺の海で手に入れたという真珠、珍貝等の宝、海中で訪れた蛟室（後述）、そして主人公が宝を得て一生を送ったとする

閩越（今日の福建省）に從えば、「南海」と呼ばれた地域の海が連想されよう。

南海には、大きく分けて広狭二義が存する。

南海とは、古くは、四方の一つとしての南方、あるいは南方の海の意味に用いられたが、中国の地理的知識や交易地域の拡大とともにその指し示す範囲もひろがって行き、ついにはアラビア海・ペルシア湾・紅海・アフリカ沿岸の一部までも含むようになったとされる。これが広義の南海である。一方狭義の南海は、紀元前二一四年に秦の始皇帝が嶺南の地を経略して三郡（桂林・南海・象郡）を置いて以来、唐・宋に至るまで置かれた南海郡を言い、その治所であった今日の広東省広州市を中心とする南シナ海沿岸地域を指す³。

唐代の人々の意識にある「南海」が具体的にどこを指すかについては、なお詳細に用例を当たる必要があるが、それが漠然とした「南の海」ではないことは、

1 『新旧唐書』に見える、八十六条の「南海」の字を含む記事を概観するとその多くが南海郡とその周辺（当時ここを治所とした嶺南道周辺）を指すこと⁵。

2 『全唐詩』に見える、「南海」の語を含む五十六首の詩においても、1と同様な傾向が見られること⁶。

3 『太平広記』所収の「南海」の表題を持つ項目、すなわち、

① 「南海祭文宣王」（卷一六一、出唐孟瑄⁴『嶺南異物志』傍点

唐代伝奇「陸顯伝」に関する一考察（中）

増子。以下同じ）

② 「南海」（卷三九四、出唐・劉⁵、劉⁶、劉⁷）

③ 「南海大魚」（卷四六四、出唐・戴⁸、戴⁹）「廣異記」。嶺南節度使の何履光の話

④ 「南海大蟹」（卷四六四、出「廣異記」。波斯人の南海での体験談）

⑤ 「南海毒虫」（卷四七六、出唐・房千里¹⁰）「投荒錄」。房千里が、嶺南に属する端州に左遷された時の見聞を記す

⑥ 「南海人」（卷四八三、出「南海異事」）
のうち、④と⑥を除いて、明らかに話の舞台を嶺南としていること。

4 『太平広記』卷四〇〇～四〇五の「宝」の項のうち、

① 「珠池」（卷四〇二、出『嶺表録異』。廉州）

② 「魏生」（卷四〇三、出唐・皇甫氏）「原化記」。嶺南

③ 「集翠裘」（卷四〇五、出唐・薛用弱）「集異記」。南海郡

④ 「玉菴膏」（卷四〇五、出唐・張說）「宣室志」。安南

に見える「南海」のほとりとされる地域が、当時の嶺南道の境域にあること³。

などの例からも明らかであろう。

これらの例より類推すれば、当時、師^{スリランカ}子^{インド}、婆羅門^{アラビヤ}、波斯^{ペルシア}などとの交易が盛んに行われ、彼らを通じて遙かアフリカ周辺の知識をすら手に入れていたと言う実態をふまえても、多くの唐人にとって南海とは先ず第一に狭義の南海、つまり南海郡を中心

とした地域—唐代の行政区分では嶺南道に属する地域とその周辺の南シナ海を指すものと見て良いであろう。唐代全盛時の嶺南道の境域は、広東・広西両省より現在のベトナム北部を含む広大なものであった。⁽¹⁰⁾

* * *

嶺南という言葉から、当時の人々が先ず連想するのは、瘴氣に満ちた左遷の地と言うことであろう。

元和十四年、時に刑部侍郎であった韓愈が、仏教の信仰厚い憲宗にその非を説いた「仏骨を論ずるの表」を奉ったかどにより、潮州（今日の広東省潮州市）へ左遷された際の作という次の詩は、当時の人々の嶺南への思いの一方を如実に示す。

左遷至藍関、示姪孫湘 左遷せられて藍関に至り、
姪孫湘に示す

一封朝奏九重天 一封 朝に奏す 九重の天
夕貶潮州路八千 夕に潮州に貶せらる 路八千
欲為聖明除弊事 聖明の為に弊事を除かんと欲す
肯將衰朽惜殘年 肯て衰朽を將て殘年を惜しまんや
雲橫秦嶺家何在 雲は秦嶺に横たわつて 家何処に在りや
雪擁藍関馬不前 雪は藍関を擁して 馬前まず
知汝遠來応有意 知る 汝遠く来るは、応に意有るべし
好取吾骨瘴江辺 好し 吾が骨を取めよ 瘴江の辺（『全』
卷三四四）

嶺南には、こうした瘴氣が満ちているのみか、象や犀などの巨獸、毒蛇や射工、沙蟲、沙虫などが人を害そうと身を潜めていると考えられていた。⁽¹¹⁾

その一方で、嶺南は大部分の唐人にとって、未知の土地であるがために、ある種のロマンをかき立てる所であり、とりわけその中心地広州は、「海のシルクロード」の玄関口として栄え、「市舶宝貨の聚まる所」—富の集散地とも意識されていた。

唐人の南海へのロマンチズムを示した詩として有名なものは、次の詩であろう。

腥臊海辺多鬼市 腥臊たる海辺 鬼市多し
島夷居処無鄉里 島夷の居処 郷里無し
黒皮年少学採珠 黒皮の年少 珠を採るを学び
手把生犀照鹹水 手に生犀を把りて 鹹水を照らす（施肩吾
「島夷行」〔『全』卷四九四〕）

なまぐさい臭いのする海辺には、鬼市が多い。⁽¹²⁾ 島の異民族たちはここを故郷とする者たちではない（彼らは故郷を離れ、西に東に渡り歩いている者たちなのだ）。黒い肌の年少は、真珠を採ることを習い覚え、手に犀の角をとって水中を照らしながら海水に潜っていくのだ。

この詩が具体的にどこを舞台とし、作者施肩吾が、果たして直接見聞した事柄を歌ったものであるか否かについて、種々議論があ

る。しかし、ここに歌われているもの多く、鬼市、黒皮年少、探珠、生犀等が、南方の風物を示した、ある種のロマンチズムを掻き立てる物ばかりであることから類推すれば、自身の体験ではなく、むしろ作者が読者たちに、ロマンチズムを喚起させるような詩語を、いわば寄せ木細工のように組み合わせて作ったと考える方が、実態に即していると言うべきであろう。

異域としてのある種不気味さと異域なるが故のロマンチズムの共存する南の地¹⁶。そして、それとほぼ同じような思いを人々に抱かせる海「消麴虫」という奇妙な虫をめぐる伝奇「陸贖伝」の終盤を飾るにふさわしい場面設定と言えよう。

二

〔2〕 蛟室

海のとおりで、消麴虫の効力によって、ついに「至宝」を手に入れた彼らが訪れた場所は、海中の竜宮と蛟室であった。

先行の訳注（或いは解説書）では、「蛟室」の解釈は次の三種に分かれる。

A 蛟の部屋とするもの

- ① 石田幹之助『増訂 長安の春』（平凡社東洋文庫、一九六四年）

- ② 前野直彬『唐代伝奇集』2（平凡社東洋文庫、一九六四年）

唐代伝奇「陸贖伝」に関する一考察（中）

- ③ 今村与志雄『唐宋伝奇集』下（岩波文庫、一九八八年）

- B そのまま蛟室とするもの
 - ① 周楞伽『挿図本 唐代伝奇選訳』（中州古籍出版社、一九八四年）

- ② 葉桂剛『中国古代十大伝奇賞析（白話本）』下（北京広播学院出版社、一九九三年）

- ③ 劉世徳ほか『中国古代小説百科全書』（李剣国執筆、中国大百科全書出版社、一九九三年）

- C 蛟人の室とするもの
 - ④ 陸昕ほか『白話 太平広記』（北京燕山出版社、一九九三年）

- ① 高光ほか『文白対照 太平広記』五（天津古籍出版社、一九九四年）

これらのうち、A説は作品中、「竜宮蛟室」とある事から、「蛟竜」の語を連想し、「竜宮と蛟の部屋」と解釈したものであろう。良く知られるように蛟は、「蛇に似て四足。竜の属なり。」（『山海経』「南山経」 虎蛟に対する西晋・郭璞注）とあるように竜の一種と考えられた動物である。

B説は、単に「蛟室」とするのみで、A、C何れの説を採るかは明確ではないが、蛟室の所在が南海にあるとされていることからすれば、この言葉から連想すべきなのはC説にいう、「蛟人の室」ではないだろうか。

蛟人は、蛟人とも言い、水中に住む人魚のようなものと考えられ、

魏・曹植「七啓」其五に、

○弄珠蜂、戲鮫人 珠蜂じゆはち（珠蚌。真珠を含んだ、どぶがい）を弄ろうし、鮫人に戯る（『文選』卷三四）

と見えるほか、同じく『文選』所収の他の作品にも、次のように歌われている。

○萍実ひよじ（睡蓮科の浮き草の実）の復あひび形かたちれんことを想ひ、

靈嬰れいゐ（嬰は前出）を鮫人に訪たづぬ（西晋・左思「呉都賦」〔卷五〕）

○其の垠（果て）には則ち天琛ちん水怪（天然の宝や水中の怪）、鮫人の室有り（西晋・木華「海賦」〔卷十二〕）。

○淵客 室を巖底に築き、鮫人 館を懸流に構へ（西晋・郭璞「江賦」〔卷十二〕）

これらの作品と相前後して成ったと思われる志怪の類では、その様子がより詳しく描写される。

○南海外有鮫人、水居如魚、不廢織績。其眼能泣珠。従水出、寓人家、續日売絹。将去、従主人索一器、泣而成珠滿盤、以与主人。（西晋・張華「博物志」卷九「叢書集成初編本、挾清・銭熙祺輯「指海」第十集」）。

○南海外、有鮫人。水居如魚、不廢織績。其眼泣則能出珠（東晋・干宝「搜神記」卷十二「汪紹楹校注、古小説叢刊、中華書局、

一九七九年）。

○（吠勒國人）乗象入海底取宝、宿於鮫人之舍。得淚珠、則鮫所泣之珠也。亦曰泣珠（後漢・鄭憲？「漢武洞冥記」卷三「明・顧元慶「顧氏文房小説」所収」）。

○揚州有鮫市。市人鬻珠玉而雜貨・蛟布。鮫人、即泉先也、又名泉客。

○南海出蛟綃紗。泉先・潛織、一名竜紗。其価百余金。以為服、入水不濡。

○南海中有鮫人室。水居如魚、不廢機織。其眼能泣則出珠。晋木玄虚海賦云天琛水怪鮫人之室（以上三例は、梁・任昉「述異記」〔清・馬俊良「竜威秘書」第一集「漢魏探珍」所収〕）。

右の詩文から見出される鮫（蛟）人の特徴は、

①概ね、南海に棲む。

②その住まいは水中で、鮫（蛟）人室、鮫（蛟）室と呼ばれる。

③流す涙が「泣珠」という真珠になる。

④機織りに長じている（その布は、蛟綃紗と呼ばれる。その布で服を作れば水に入つても濡れない。高額で取り引きされる）。

⑤泉先、泉客の異名を持つ。

等が挙げられよう。

唐代になっても、蛟（蛟）人に対するイメージは、前代にできあがったものをほぼそのままの形で踏襲している。

その受容の状況は、『全唐詩』で見える限りでは、「蛟竜」が非常に多くの詩人たちに歌われていたのに比べると、広く人口に膾炙していたとは必ずしも言い難いが、初唐より晩唐に至る詩人たちに継承されていたことからすれば、長い期間に涉って、一定以上の認知を受けていたことは確かであろうである。

○解字鄰蛟室

解字（役所の建物） 蛟室に鄰し（孟浩然）
「永嘉上浦館にて張八子容に逢ふ」（『全』卷一六〇）

○往來南越詣蛟室

往來の南越 蛟室を詣んじ（胡曾「車遙遙」）
（『全』卷二五）

○邑里雜蛟人

邑里 蛟人を雜ふ（岑參「張子の南海に尉たるを送る」）
（『全』卷二〇〇）

○蛟人織杼悲

蛟人 織杼悲し（杜甫「雨」四首其四）
（『全』二二〇）

こうした用例を踏まえた時、たとえ「竜宮」「蛟室」という対句的用法を念頭に置いたとしても、唐人である「陸顛伝」の作者が、蛟室を単に「蛟竜のすみか」とだけイメージして作品中に配し、そして当時の読者たちがそれをそのようなものとして受容したとはにわかには考えがたい。やはり、彼らは蛟室とは蛟人の室と捉えていたと見てしかるべきであろう。そこには、蛟人たちの織る高価な絹織物（蛟絹紗）と、その涙から成ったという真珠（涙珠）が満ち満ち

唐代伝奇「陸顛伝」に関する一考察（中）

ているとイメージされたに相違ない。本稿注（16）に示したように、彼らの南海に抱いたロマンチズムの要素には、富をもたらず所というイメージがあったと考えられた。まさに、そうした海中にあると考えた蛟室こそ、そのイメージを満たす場所に他ならないのである。

以上、「陸顛伝」の後半部分に登場する「南海」と「蛟室」について考察したが、これらの用語を通じて本作品の性格をどう捉えることができるのか。前稿で考察した用語と併せて、次稿でまとめることとした。

【注】

（1）この問題については、既に少なからぬ指摘がある。就中、石川忠久「文学に現れた海—中国と日本—」は、日中の海にまつわる歴代の詩を中心にこの問題を詳細に検討して参考となった（同氏「陶淵明とその時代」〔研文出版、一九九四年〕所収。初出は、『中国文学の比較文学的研究』所収、汲古書院、一九八六年）。

ただ、種々の工具書や後述するインターネット上に公開された学術データベースの恩恵を享受しうる今日にあつては、その指摘の的確さは概ね動かぬとしても、訂正すべき点も少なしとしない。一例を挙げれば、同論文では、唐詩には海を歌った詩が極端に少ないとし、『唐詩選』の詩題を例に挙げて考証するが、後述する『全唐詩』データベースによれば、「海」の語を含む

詩は四〇二四首、四五〇九句に及ぶ。この中から「渤海」（砂漠地帯）や「海内」（天下）、「青海」（湖の名。ココノール）など、我々が一般的に言う海以外の用例を相当数差し引いたとしても「極端に少ない」とは言えないであろう。

(2) 本稿注1に示した石川氏の論考に引く唐詩にも、巨大な鼈の類、赤い目をした怪魚（王維「秘書晁監の日本に還るを送る」）、鯨や犀（王維は犀を海に住むと見なしたという）の出没する海が描かれる。

(3) これについては、後述する。

(4) 『アジア歴史大事典』（平凡社、一九七四年初版第七版）参照。

(5) 台湾中央研究院がインターネット上に公開する学術データベースの一つである「二十五史データベース」を手がかりとして調査（ホームページアドレスは次の通り）。

<http://www.sinica.edu.tw/fms-bin/fmsw3>。目下ネット上では一部公開ながら、同研究院の資料公開によって我々の受ける裨益は、実に多大なものと言えよう。試みに、『旧唐書』に見える五十ヶ所（但し、このデータベースでは西南海も「南海」にカウントしている）、正確には四十七ヶ所）のうち、南海（嶺南）以外の用例は、

- ① 卷八十九、列伝第三十九「王方慶」
- ② 卷一八五上、列伝第一三五上、良史上「馮元常」
- ③ 卷一九〇上、列伝第一四〇上、文苑上「王勃」
- ④ 卷一九七、列伝第一四七、南蛮、西南蛮「婆利国」（Ban今日インドネシアに属するバリ）

⑤ 卷一九七 列伝第一四七、南蛮、西南蛮「盤盤国」（Pan-pa-pa Kuo今日のマライ半島中部のバンドンBandon湾付近に比定される）

の五例であり、そのいずれもが海としての「南海」すなわち、南シナ海を指すと考えられるものであった。

(6) 本稿注5と同じく、インターネット上に公開されている台湾の元智大学（元智工学院）の「網路展書説」中の『全唐詩』の全文検索を手がかりとした。これは、本文の校訂が十分ではないため、『全唐詩』原文と対照して用いる事が必須である。ホームページアドレスは、次の通り。

<http://cls.admin.yzu.edu.tw/QTS/query.htm> 増子は、同資料を基に、中華書局本『全唐詩』に当たったが（やはり、誤記・欠落や、詩題と詩句との不一致などの間違いが多く発見された）、詩中の用語や作者の経歴等を通じて、確実に嶺南周辺を歌ったと考えられるものは、五十六首中二十九首であった。参考までに作者と作品名及び、『全唐詩』の巻数を掲げておく。

- ① 張籍「雜曲歌辭・傷歌行」卷二四、② 杜審言「南海乱石山作」卷六二、③ 蘇頌「饒荆州崔司馬」卷七三、④ 張說「端州別高六戩」卷八七、⑤ 同「南中別陳七季十」卷八七、⑥ 沈佺期「敕到不得婦題江上石」卷九七、⑦ 韋應物「送馮著受李廣州署為録事」卷一八九、⑧ 杜甫「病橘」卷二一九、⑨ 同「自平」卷三二〇、⑩ 同「送段功曹帰広州」卷三二七、⑪ 杜甫「諸將五首」卷三三〇、⑫ 錢起「南中春意（一作思）」卷三三六、⑬ 元結「送子孟校書往南海」卷二四一、⑭ 劉禹錫「踏潮歌」卷

- 三五六、^⑮同「南海馬大夫遠示」卷三六一、同^⑯「南海馬大夫見惠著述三通」卷三六三、^⑰韓愈「送惠師」卷三三七、^⑱杜牧「寄内兄和州崔員外十二韻」卷五二三、^⑲許渾「南海府罷南康」卷五三三、^⑳同「南海府罷歸京」卷五三四、^㉑同「南海使院」卷五三七、^㉒賈島「送裴校書」卷五七一、^㉓同「送安南惟鑒法師」卷五七二、^㉔高駘「南海神祠」卷五九八、^㉕黃滔「南海幕和段先輩」卷七〇五、^㉖曹松「南海」卷七一七、^㉗同「南海旅次」卷七一七、^㉘同「南海陪鄭司空遊荔園」卷七一七、^㉙陳陶「南海石門戊懷古」卷七四五、^㉚同「南海韋七使君」卷七四五
- (7) 嶺南地方の物産を紹介したもの。別名『嶺南録異』、『嶺表録異記』、『嶺表録』など。

- (8) また、『太平広記』卷四〇五「玳瑁たいまい盆そがく」(出蘇そがく鸚そがく「杜陽雜編」)に見える南昌国は、国としての名は、『新旧唐書』共に見えないが、『新唐書』卷四三上「地理七」上に見える嶺南道白州の治所の南昌(今日の広西チワン族自治区博白県の南の地)を指すか。更に、これは唐代以前の志怪の記述であるが、南海の「鯨魚目」と言う珠について述べる中に「合浦に珠市あり」と見えるが、合浦(今日の広西チワン族自治区)もまた、唐代の嶺南道の境域である(梁・任昉「述異記」〔『太平広記』卷四〇二〕。但し、この項は、後述する『竜威秘書』本「述異記」巻上では、「鯨魚目」とは別に述べられている。が、このテキストでも南海と合浦を重ね合わせていることでは共通する)。

- (9) 『太平広記』卷四八二(出段成式「西陽雜俎せいようざん」)にも、波斯商

人から得た知識と思われる撥はつ抜ぶつ力りき国こくの話が見える。同国は、今日の東アフリカ、ソマリアのベルベラBerbera海岸地方を指すとされる(今村与志雄訳注「西陽雜俎」五、平凡社東洋文庫、一九八〇年)。なお、中国人たちが自らの手で大型船舶を造船して、実際に外洋に乗り出すようになるのは、宋、元、明代になってからのことだと言いう(謝弗著・呉玉貴訳「唐代的外来文明」〔中国社会科学出版社、一九九五年〕、原題は、「The Golden Peaches of Samarkand: A Study of Tang Exotics」1963 The University of California)。この説通りであるとすれば、唐人の外洋に対する知識の多くは唐に來航する波斯などの国々の人々より得たことになろうか。

(10) 海ですら日常の外の世界と意識した大多数の人々にとつては、或いは、この南シナ海周辺の地域辺りが想像の限界だったのでないか。前にも触れたように、「陸暕伝」では、海で得た宝を嶺南道の境域にあつた南越で売つたとした。このことから見ても、その「海」が、遠くアラビヤやアフリカの海であつたとは考え難い。この場合も狭義の「南海」を考へるべきであらう。なお、作品中登場する閩越の地は嶺南道に隣接する。

(11) 植木久行「唐詩の風土」(研文出版、一九八三年)参照。同書によれば、射工は南方の水中に生息し、人が岸边に近づくと息・水・沙を吐きかけて病気にさせるとされ、沙蝨は水中に生息する赤い虫で、人の皮膚に入り込んでその人を殺すと考えられていた。更に、沙虫は沙中に潜んで、人がこれに刺されると三ヶ月で死ぬと考へられていたという。

(12) 夜間、灯火をつけずに行われた交易。元來は、異民族同士の「沈黙交易」であったが、やがては、妖怪変化の類が集まって行われると信じられるようになった。これについては、相田洋『異人と市』（研文出版、一九九七年）の考証が、先行の諸説をふまえて詳細を極める。

(13) 犀の角を燃やして灯りとすると想像したか。その実態はともかくとして、犀は異国情緒を醸し出すものと認識されており、本稿注2に示したように、詩人たちの中には、犀を海水にすむ獣と考える者すらあった。なお、卑見では、本詩の表現は、『晋書』卷六七に見える、温嶠が犀角を燃やして水中に潜む怪物を見極めたという「犀照牛渚」の故事を或いは念頭に置くのではないかと思うが、いかがなものか。

(14) この問題については、本稿注12に引いた相田洋『異人と市』が詳しい。

(15) これについては、「陸顯伝」と併せて、次稿において、より詳細に検討を加えたい。

(16) このロマンチズムは、単に甘美なそればかりではなく、①異国の富の集散する所、②海中から、真珠、珊瑚、玳瑁や珍貝などの宝が採取される所つまり、人々に富をもたらす所というイメージが濃厚に入り交じったものである。

(17) 初出は創元社、一九四一年。

(18) この問題については、中野美代子『中国の妖怪』（岩波新書、一九八三年）では、

①人魚のイメージは、人身蛇尾（竜尾）の妖怪と結びつく。

②鮫と蛟の二字は混用されることが多かった事を考えると、まず蛟人すなわち蛟竜の下半身或いは尾と人間の上半身が結びついたものができたのであろう。人身竜尾の妖怪は漢代の画像磚に頻出する。この段階では性別は一定していない。

とする（同書Ⅲ「靈獸と魑魅魍魎」）。なお、この問題については別途稿を改めて詳述したい。

(19) 蚌は、和名どぶがい。淡水真珠が実際にとれるのは、こちらであるが、小尾郊一訳注『文選』五では、「はまぐり」と訳す（集英社『全釈漢文大系』、一九七五年）。この場面は、淡水の有様を描写した部分であるにも関わらず、ハマグリと訳すのはいかなるものであろうか。これは、同書の鮫人の語釈に見えるように、鮫人は海中に住むという先入観（或いは鮫の字に引かれたか）にとらえられての解釈と言える。後に触れるように鮫人は海中に住むとだけ考えられていたわけではない。

(20) 四部叢刊本（函書寮、静嘉堂藏宋刊本を影印）『太平御覧』卷七九〇「四夷部十一」（「能く泣珠す」まで）、同八〇三「珠宝部三」（「水より出でて」以下）にも引用。

(21) 本話は、『芸文類聚』卷六五（「産業部」上）、八四（「宝玉部下」）、「御覧」八〇三（「珠」下）に、それぞれ『搜神記』から引用した旨書かれている。

(22) 本書は、後漢・鄭憲撰と銘打っているが、内容的に見れば、梁代以降の成立と見るのが妥当とされる（劉世徳主編『中国古代小説百科全書』（盧仁竜執筆）、中国大百科全書出版社、一九九

三年)。

(23) 梁・任昉「述異記」の例のように、揚州(江蘇省揚州市)の話とするものほか、後に述べる唐詩では、新羅に赴く人を送る詩等にもこの語が見え(舞台は東海)、また、淡水(洞庭湖、江中)の鮫人・鮫室を歌った詩も存する。特に淡水については、有名な唐・李朝威「柳毅伝」の竜宮が、洞庭湖に在るとしたのと同工と言えよう。しかし、それらの例は必ずしも南海の話に比べて多いとは言えない。ちなみに、近藤春雄「唐代小説の研究」によれば、竜宮という発想は、唐代に確立したもので有るという(第五節「竜宮譚の世界」、笠間書院、一九七八年)。この指摘通りとすれば、竜宮よりも、「鮫(蛟)入室」の方が、先にイメージが確立したこととなる。

(24) 先に示した元智大学の『全唐詩』全文検索によれば、「蛟竜」の語を含む詩は、一四四例。一方、「鮫(蛟)人」、「鮫(蛟)入室」の語を含む詩は、その三分の一弱の四一例である。その作者、詩題及び『全唐詩』所載の巻数は、左記の通りである。

〔鮫室〕五例

- ①胡曾「車遙遙」卷二五、②戴叔倫「送東陽顧明府罷歸」卷二七四、③姚康「賦得巨魚縱大壑」卷三三一、④長孫佐輔「楚州塩壚古牆望海」卷四六九、⑤章孝標「送金可紀帰新羅」卷五〇六

〔蛟室〕六例

- ①孟浩然「永嘉上浦館逢張八子容」卷一六〇、②杜甫「舟泛洞庭一作過洞庭湖」卷三三四、③劉禹錫「競渡曲」卷三

唐代伝奇「陸顯伝」に関する一考察(中)

- 五六、④皮日休「投竜潭」卷六一〇、⑤皮日休「太湖詩」卷六一〇、⑥陸龜蒙「奉和襲美太湖詩二十首其一初入太湖」卷六一八

〔鮫人〕二六例

- ①齊己「升天行」卷二四、②李嶠「太平公主山亭待宴应制」卷六一、③李頎「鮫人歌」卷一三三、④儲光羲「采蓮詞」卷一三七、⑤孟浩然「登江中孤嶼贈白雲先生王迥」卷一五九、⑥岑參「送楊瑗尉南海」卷二〇〇、⑦杜甫「漢陵西南台」卷二一六、⑧同「奉同郭給事湯東靈湫作」卷二一六、⑨同「閩鄉姜七少府設贍戲贈長歌」卷二一七、⑩同「兩四首」卷二三〇、⑪顧況「竜宮操并序」卷二六五、⑫同「送從兄使新羅」卷二六六、⑬盧綸「慈恩寺石磬歌」卷二六七、⑭劉禹錫「莫騫歌」卷三五四、⑮同「韓十八侍御見示」卷三五五、⑯同「傷秦姝行」卷三五六、⑰張署「贈韓退之」卷三一四、⑱李紳「登禹廟回降雪五言二十韻」卷四八一、⑲鮑溶「采葛行」卷四八七、⑳顧雲「吾歌」卷六三七、㉑方干「贈夏侯評事」卷六一一、㉒吳融「贈書光上人草書歌」卷六八七、㉓無名氏「斑竹」卷七八五、㉔成彥雄「暮春日宴溪谷亭」卷七五九、㉕水府君「与鄭德璘奇遇詩」卷八六四、㉖李涉「淮陽行」卷八八三

〔蛟人〕四例

- ①劉商「姑蘇懷古送秀才下第帰江南」卷三〇三、②施肩吾「酬周秀才」卷四九四、③皮日休「初夏遊楞伽精舍」卷六〇九、④無名氏「雞頭」卷七八五